



おいしい! と喜んでもらうため

ブドウ栽培の作業は多岐にわたる。剪定、古いツルの除去、除草、農薬散布、枝の誘引、摘花、摘粒、収穫、運搬など。機械がまったく無くても栽培は可能だけど、かなりの労働力と時間を要する。

剪定枝をチップ化するウッドチップパーは、JAからレンタルした。買えば、500万円はするという。

1～2月は古いツルの除去と枝の誘引。古いツルは、残すとブドウの木の病気の原因になる。大変だけど、今は人の手でやるしかない。夫婦2人で黙々とやっていた。

現在、あちこちのブドウの産地で戦略的なスマート農業技術等の開発・改良事業が始まっている。労働力不足を補い、技術を継承するためだ。

ある企業が開発中のAI(人工知能)搭載農業用ロボットは、ブドウ棚の下を無人で自走する。カメラで撮影し、摘粒すべき粒や収穫に適した房をAIで判別、ベテラン生産者のノウハウを学習させたロボットアームで作業する。このロボットを使えば、不慣れな新規就農者でも、ベテラン農家のようにおいしいブドウを安定生産できるという。

簡単にできることはいいが、導入には費用がかかる。



冬季剪定は、株を健康に保ち、おいしいブドウをつくるためには欠かせない工程だ。

その剪定のシーズン前に、緑区内のブドウの生産者を集めて講習会が開催された。講師は、愛知県尾張農業改良普及課の専門員。ここで紹介したほ場で、実際に枝を切りながら進められた。

生産者は、それぞれ独自のノウハウを既に持っているが、品種によって異なる方法や新たな考え方を真剣に聴いていた。勤めていた会社を辞めて新規に就農された方も、ベテランの生産者とともに、講師の説明に耳を傾けていた。

撮影場所：緑区桶狭間
撮影取材日：2022年 1月20日
2023年12月 4日

(注)取材させていただいたほ場では、一般の方の見学などは行っていません。